

## 令和元年度愛知県スモン患者検診における血液・尿検査

鷲見 幸彦 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター病院長室)  
新畑 豊 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)  
武田 章敬 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)  
堀部賢太郎 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)  
山岡 朗子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)  
辻本 昌史 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)  
中野 真禎 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)  
河合多喜子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター神経内科部)

### 研究要旨

愛知県スモン検診受診者に対し、現在の健康状態や合併症の発見など患者の健康管理に有用な情報を得ることを目的として血液・尿検査を試行した。対象は令和元年度愛知県スモン患者集団検診を受診した12名(男性4名、女性8名)。年齢は65歳から89歳(平均79.5歳)。対象地区は名古屋・知多・尾張地区。10名は検診会場で2名は自宅で採血を行った。血液検査(血算、電解質、肝機能、腎機能、脂質、血糖、HbA1c)12名に、尿検査(定性)を11名に実施した。深尾研究に参加していなかった3名からバイオバンク、検体保存の同意を得たが、1名は当日発熱で参加できず、1名は同意撤回であった。令和元年度の結果は軽微な異常5名、軽度の異常5名、高度の異常2名であった。医師の経過観察が必要と考えられる軽度以上の受診者の全体に対する比率は58.3%であった。12名中10名が平成27年度、29年度に受診しており経過を観察できたため前回との比較を行った。高度の異常の原因はHbA1c上昇、貧血、腎機能低下であった。軽度異常の原因は、高コレステロール血症が4名と多く、HbA1c上昇、低カリウム血症、尿酸値の上昇、クレアチニンの軽度上昇がそれぞれ1名であった。個々の患者の経年的変化では不変が7名、一段階の悪化が3名であった。受診者の高齢化は頭打ちの傾向を示しているが受診者は減少してきており、将来に向けての検体保存対策が必要と考えられる。バイオバンク保存検体が1名から得られ同時に採血保存された。

### A. 研究目的

愛知県スモン検診受診者に対し、現在の健康状態や合併症の発見など患者の健康管理に有用な情報を得ることを目的として血液・尿検査を試行した。

### B. 研究方法

対象は令和元年度愛知県スモン患者集団検診を受診した12名(男性4名、女性8名)。年齢は65歳から89歳(平均79.5歳)。対象地区は名古屋・知多・尾張

地区(名古屋、春日井、瀬戸、尾張旭、一宮、稲沢、津島、北名古屋、江南、犬山、小牧、大府、半田、東海、常滑、知多等。)10名は検診会場、2名は自宅で採血を行った。血液検査(血算、電解質、肝機能、腎機能、脂質、血糖、HbA1c)12名に、尿検査(定性)を11名に実施した。内容は表1に示す。

### C. 研究結果

令和元年度の結果は軽微な異常5名、軽度の異常5

表1 対象患者基本データ

血算：白血球数、赤血球数、ヘモグロビン ヘマトクリット、血小板数
電解質：Na、K、Cl
肝機能：AST (GOT)、ALT (GPT)、ALP、LDH、 ChE、総蛋白、アルブミン、総ビリルビン
アミラーゼ
腎機能：尿素窒素、クレアチニン、尿酸
脂質：総コレステロール、中性脂肪
血糖、HbA1c

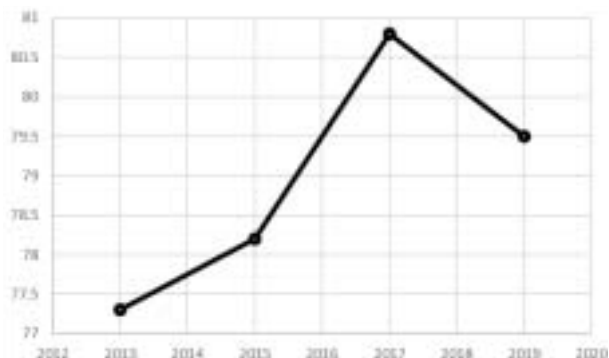


図2 受診者の平均年齢の変化

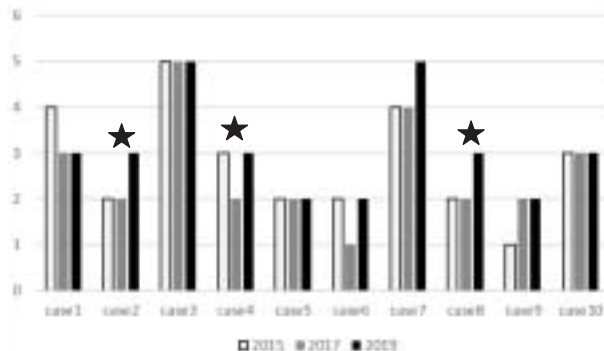


図1 個々の検診者の経年的重症度変化

X軸は検診者番号 Y軸は重症度評価  
は悪化。今年度は改善者はみられなかった。

名、高度の異常2名であった。医師の経過観察が必要と考えられる軽度以上の受診者の全体に対する比率は58.3%であった。12名中10名が平成27年度、29年度に受診しており経過を観察できたため前回との比較を行った。高度の異常の原因はHbA1c上昇、貧血、腎機能低下であった。軽度異常の原因は、高コレステロール血症が4名と多く、HbA1c上昇、低カリウム血症、尿酸値の上昇、クレアチニンの軽度上昇がそれぞれ1名であった。個々の患者の経年的変化では不変が7名、一段階の悪化が3名であった(図1)。深尾研究に参加していなかった3名のうち1名から保存検体が得られた。

#### D. 考察

受診者の減少と高齢化している患者の状況からより頻回な検診を行うために、平成25年度から尾張地区と名古屋地区を合同で検診を行っている。名古屋・尾張地区においても参加者数は次第に減少してきている。また、三河地区では平成23年度をピークに受診者の

平均年齢が若くなってきていたが、当地区でも本年度初めて平均年齢が若くなった(図2)。介助が必要なスモン患者にとって、受診できる患者は限定されてきている可能性がうかがえる。また平成27年以来毎回継続して検診を受けている患者が10名おり経過を検討した<sup>1,2)</sup>。今回は改善している受診者はおらず、軽度悪化が3名であり、軽度でも複数の問題をもっている受診者が増加している印象である。受診が減少しているスモン患者の病態の検討は今後しだいに困難になっていく可能性がある。スモン発症の大きな謎である、「なぜ日本人に多く発症したのか」、「同じようにキノホルムを摂取しても、発症しなかったり、重症度に差があるのか」、はいまだ解明されていない。今後の研究を考えると、研究に必要な血液検体の保存に関して早急に検討する必要があると考える。本年度から開始された久留班長を中心とした検体保存プロジェクトにバイオバンクを有する施設として協力していく。

#### E. 結論

1. 愛知県名古屋・尾張地区のスモン患者を対象とした検診を行い血液・尿検査の異常について検討した。何らかの経過観察が必要と考えられる受診者の割合は58.3%であった。
2. 10名は2015年から連続3回受診しており、経年的変化を2年前、4年前と同一の患者で比較検討できた。不変が7名、一段階の悪化が3名であった。
3. 受診者の高齢化は頭打ちの傾向を示した。
4. 受診者は減少してきており、将来に向けての検体保存対策が必要と考えられる。深尾研究に参加して

いなかった1名からバイオバンク検体保存を行った。

## I. 文献

- 1) 鷺見幸彦. 平成 27 年度スモン患者集団検診における血液・尿検査. スモンに関する調査研究 平成 27 年度総括・分担研究報告書. 129-131, 2016
- 2) 鷺見幸彦. 平成 29 年度愛知県スモン患者集団検診における血液・尿検査. スモンに関する調査研究 平成 29 年度総括・分担研究報告書. 117-118, 2018